

ませんので、「健康って何？」と言っても余り興味ないと思う……なくはないでしょうけど、政策として興味があるかどうかは別なんで、政策をつくる場合にどうか、という視点から入っていくということで、「政策づくりをしていくにはどうしたらいいか」というところから入って行って、そこで、まず問題解決型でこういうふうやってきたことがありますよね。でも、こういう目的設定型でやると、こんなことができるというようなことをイントロに、入っていきまして。

それから、健康の考え方についても、テキストがそうなっているのでやっているんですが、要するにベクトルの考え方で、座標軸の右側の方、横の方、要するに体の完全にいい状態から悪い状態というのと、暮らしがそれぞれの段階で最高な状態にあるという、縦のベクトルと両方あるのに対して、横のベクトルは医学的な変化にもあるし、それが例えば地域だったらその地域の経済状態であったりとか、交通の状態だとか、いろんなのに変えられる。でもやはりどんな政策についても、最高の暮らしの姿が描けるでしょう、というような感じで説明をしていって、縦方向のベクトルとの合成で考えられるんだねという感じで、今回話をしました。

その中で、しくみづくりが大事だという話を、そのしくみづくりの話が、結局風船図をつくっていくところまでつながっていくように意識させておいて、条件を出していくときに、本人、家族、近隣とか、保健医療、福祉とか、きれいな水、何とかというのを意識して条件を出してもらおうようにいつもしているんで、その辺のしくみが大事だよというのを意識してもらって、「後でここは重要になってきますからね」ということを一応理解してもらった上で、その辺を強調してだんだん話していったという感じです。

基本的には岩永先生のつくっていただいたパワーポイントでやりました。ただ、「計画づくりは」という三角の図はちょっと順番を入れかえましたが、基本的にはあの順番で話をして、それが午前中で、午後はあるべき姿についても最初にイメージしづらいので、「どんな暮らしだったらいいですか」と言われてもイメージわからないんで、説明のときに使ったパワーポイントにある竹トンボの例とか……竹トンボの例だと、老人だとそのまんまになっちゃうので、母子の方を「こんな例が出たらいいですよ」と映し出しておいて、「これで老人になったらどうですか」みたいな、テキストを見ちゃえば同じなんですが、そんな感じでイメージを持ってもらった上でやった。

あるべき姿が大体出てきて、手段が出てきたり、いろんなのがごちゃごちゃに出てくるんで、ある程度出た段階で「こういうのは手段ですね」とか、「こういうのはこうですね」というような解説をして、条件を出すときには、お供え餅のしくみづくりを意識してもらって出してもらいました。

私も江ノ島セミナーとかいろいろ研修をやらせていただいた最初のころは、論理性とかいろいろ気になって、細かいところまで注意したんですが、そうすると、きちんとしたことを勉強するのもあれなんだけど、わからない最初の段階で、数式の基本的なのかわからないのに、いきなり微分を教えるのもわからないように、段階があるのかなという気がだんだんできて、余り細かいところまでぎちぎちやっちゃうと、かえって詰まっちゃうたり、頭が飽和状態になって先に進まないという現象が、起きる一つの原因のかなという感じがしてきたので、馬に乗る場合にははずなを締めなければいけないんですが、あるときは緩めないといけないんで、その辺を本当に大事なところだけはきちんとおいて、あと我々がグループワークでファシリテーターをやっていると、「今どんな状況？」「こんな状況です」と言うとき、先生が前で話していたやり方と同じなんですが、私は最初のころはファシリテーターをやるのが多かったんで、一つ一つのグループに細かいことをぐちゃぐちゃ言っていたんですが、今回は余り言わないで、いろいろ入ってきた情報に対して、ある程度出た段階で「こういうのはこうですね」とか、理由をつけて、主語プラス述語で何で言うのかというのは、その後で事業が出てきたときに、事業の実施場所が違うからこういうふうに変わってきますよねとか、いろいろ言って、そういうふうやっていくのは必要なんだなということがわかってもらえるように、本当にポイントになるところだけは、押さえるようにして、あとはできるだけ言わないようにしたというか、見逃したというか、そうすることによって、積極的に皆さん発言されて、ワイワイガヤガヤ楽しい雰囲気できたというのがあって、それが特に最近ねらっていくというか、今回もそれをねらっていくって、ちんまりなっちゃうよりもワイワイガヤガヤやって、楽しくやれて「これはなかなかいいな」という感触を持って終わる方が大事かなと。

全体が一通りわかって最後までいくことと、最後までいって、こういうものなんだ、というのがわかってもらえることと、それから、楽しくやれて、これはなかなかいいな、という感じで、まさに主体的にやってもらえるようなことをねらいました。だから、ちょっと細かいところは見逃して、「まあいいや」という感じでたずなを緩めてやりました。

鈴木さんの方から、それまでの状況を、どこでつまづきそうか、危ないかお伺いしていたので、その辺注意しながら、一番下の事業が出るときに、何々事業で何々をするということが出てないということをお伺いしていたので、そこをきちんと出してくださいね、というのを言ってとか、事業についても、事業名が出てこないようだったら、例えばこういう教室だったら、こういうことをやるような教室がありますよねとか、ちょっと例示を出してみても、何となくイメージしやすいように例示を出しました。

1日目には風船図が2枚目が書いているところは書けていましたし、1枚目のところもありましたし、まあまあ順調にしているなと思ったので、翌日に大越の話をしようかなと最初思ってたんですが、進み

が割と順調だったんで、余り先に進んでも……ちょっと頭を休めて、2日目に2枚目をもう一回見直したりという、ゆとりの時間があつた方が頭が切りかわっていいかなと思ったので、大越の話を1日目の最後に回して、途中でやめてもらいました。

だから、多くの班で2枚目を全部完成させることもできたんですが、それをやってできればいいんですが、変な風船図になったときに、後から注釈つけて、書いてから直させるとどうしていいかわからなくなったり、不満が出たりするので、ちょっと間を置く意味で1日目の最後に大越の話を入れた方がいいなと判断したんで、そのときはそういうふうになりました。

抜いたのは浄書ですね。浄書は最初の時点で入れないという方針で、とにかく時間が今までより足りないということで、抜けるのはそこだけだと思ったので、浄書だけは抜こうということで、汚い風船図だと見づらけれどまあまあいいだろうということで、そこは抜きました。

これは今まで佐々さんと2人でやっていたときと同じなんですけど、事業を中心とした風船図は模造紙だと時間がかかるので、A3の紙に書いてもらって、そこから先は機械的な作業なので、ただ「テキストは読んでますか」と言ったら、ほとんどの人が読んできてなくて、テキストも説明したかったんですが、ときどきポイントになるところは示しましたが、ほとんどテキストは使わずに、本当に大事なところは黒板に書いて「こうだよ」という話をして、あと事業を中心とした風船図への書き直しの仕方とか、一応皆さんが作業をしている間に黒板に書いておいて、「こういうふうにやります」という説明をしたり、事業を中心とした関連図から、実施要綱に変えるときにはこうするんですよ、というのを黒板に全部書いておいて、こういうふう機械的に置きかえればできますからという形で、とにかく3段階以降は頭を使わずにもできるんだということで、本当は文章をきれいにするとかいうところで文章力とか要るんですが、それをやる前に、とりあえず機械的にやればできるんだというのをまず体験してもらった方がいいなと思ったので、あえて機械的に置きかえてもらったという感じがしました。

それから、風船図とかあるべき姿のところは模造紙を回したんですが、模造紙を回してほかの班の見て一巡したと。一巡するときも、グループ数が多かったんで、前の半分と後ろの半分で回した。全体で回さなかった。

それから、風船図ができた段階で2日目の朝に発表していただいたんですが、それについては前の日の終了のときに全グループでき上がったものを壁に張っておいてもらって、お互いに見てくださいと言っておいて、その間に私もちょうとチェックをして、全グループに発表していただくのは時間がなかったんで、翌日の朝、2グループに発表していただきました。

最後の実施要綱をつくるころは、全グループに発表していただきかけたんですが、結局できなかつたんです。事業を中心とした風船図は全グループから回収して、コピーして、全グループに配った。

なぜかと言うと、実施要綱を読んでもらうのに、何もなくて聞いていると何を言っているんだかわからないので、事業中心の風船図を落として、文章になっているというのを一つずつ確認しながら聞いてもらいたかったんで、それはあえて全グループコピーして全員に配って、全グループの事業を中心とした風船図を見ながら、各グループがつくった実施要綱を読んでもらう。確認しながらやってもらうというのをやりました。大体そこで終わりました。

だから、一応一通りはできたということで、最後にちょっとコメントをつけ加えた程度だったんですが、本当は最後にしくみづくりとか、政策づくりということで、もうちょっと補足をしようと思って、最初の講義だけで言っても頭に入っていないこともあって、1回一通り作業をして「ああ、こういうものなんだな」とわかった上で聞くと、また違うのかなと。頭の中に入っていくものもあるんじゃないかなと。よく岩永先生の講義を聞いたけど、全然わからなかったけど、やってみたらわかったとか言う人もいて、やってみてからポイントを言った方がいいのかなと思って、それを最初やろうと思ったんですが、時間切れでそれはやりませんでした。一通りはできたかなという感じでした。

飯塚（禮） 一応、実施報告というのをつくってきたんですが、これで報告したいと思います。

私が最後なので、きっと皆さんがいっぱいやつた、いいこつを聞いたり、教えてもらったりできるかなと思ったけど、なかなか時間がなくて、まず岩永先生が講演した1回目のビデオを鈴木さんから送ってもらって、それをまず見たんです。でも余りにもハイレベルだったので、これを私がやるのかと思ってがっかりしたんです。

ビデオで一番参考になったのは、私の知らないことをやった部分で、例えば大越町のところのスライドの説明なんかは、私実際やってないので、人ほどしゃべれなかったんで、岩永先生のそこをすごく見ました。どうやってしゃべって教えたんだろうと思って。私はそれを見て、知った振りをして言ったんですけども、すごくビデオが参考になりました。

それと、あとは新潟の飯塚さんから、前もっていろいろ資料を送ってもらったり、アンケートの結果も送ってもらったり、シナリオまで送ってもらって本当に助かったんです。それでもう安心して、私は「これでできるぞ」と思って人のスライドを見たりしたんですが、結局はわからなくて、やっぱり岩永先生が最初に言った、「自分のストーリーでやれ」というのが、しみじみと本当に反省して、ビデオのまねしてもだめ、シナリオをまねしてもだめということで、やっぱり最初から自分のパワーポイントでやろうと思

って、岩永先生のをもう一回じっくり見たり、このテキストを見たり、前にもらった手引きを見たりして、すごく準備が大変でした。

自分の言葉で1ページ目からしゃべるといのはすごく難しく、結局自分のパワーポイントは鎌倉の絵から始めて、自分の言葉で理解して、自分でしゃべって、自分の理解した分しか人に話せないなと思って、だから私の話はぐっとレベルが低くて、数量も少ないので研修生の方には申しわけなかったかもしれないのですが、私はじっくり話ができなかった。

まず、流れのところは、ここに経過とか状況と書いたとおりですが、自己紹介したり、Model との出会いを話したり、そういう Model というのは行政活動の方法論の一つだということ、次長さんとかは「うん」というので、行政屋だとか上司に言うような気持ちで言ったつもりです。

その開発者というのは、聞いたことのない名前の人たちに言えば、それだけであとフンと言われるので、この人は岩永先生という大した立派な先生で国の人なんだとか、公衆衛生院って「何よそれ」ってと言われるので、「これは国の立派な機関で、国際的な活動をしたすごいところなんだよ」と、そういう話をやらないと、行政の人というのは聞いてくれないんです、ばかにするんですよ。まずそれをやって、この数枚に結構時間をかけたんです。

そして、あと鈴木さんの方からも言われたんですけど、私自身も2日間どう進めたらいいかというのが頭にないとかだめかなと思って、2日間のスケジュールということで、スライドに1つ加えました。きょうの午前中何するか、午後何するか、あした何するか、一応テキストに沿って話を進めるということなので、1から7だか8だかあるので、それを「これから1について言うぞ」ということで、スライドにして、「テキストの何ページに書いてあるぞ」というのもスライドにやって、それを見せて、段落ごとに話を進めていったつもりです。

流れとしては、まず午前中に1の計画と目的、2の政策立案の手順をやって、すぐ休憩しました。基本的に1時間ごとに休憩したんです。私も疲れたから1時間ごとに休憩をやって、3の行政活動は地域のしくみづくり、をやって、また休憩と。あと4、5、6という順に、住民参加だとか、話し合いを阻むものとか、参加型目的描写法による展開プロセスまでを午前中やりました。

午後のスケジュールの説明も午前中にやって、ワークショップの準備で自己紹介とファシリテーターと書記を決めるまでが、1日目の午前中にやりました。

1日目の午後は7の参加型目的描写法の実践のあたりから入って、2段階を1日目ですぐ終わらせました。途中やはり1時間ごとに休憩をとったりして、4時半になって大越町の活動を、岩永先生の言葉をまねして紹介して、1日目のまとめということで、「1日どうだったか」を振り返ってもらいました。振り返ったのは何かということ、自分たちがそれぞれ自分の言いたいことを充分グループワークで話せたか、グループワークを自分で楽しめたかということか、余り何段階で難しかったこととかと言われても、それに充分応える自信もなかったし、まずグループワークを楽しんでもらって、それに真剣に参加してもらいたいというのがあったものですから、そこを話してもらって、次の日のスケジュールを説明して、5時には終わったという感じです。

2日目は、ワークショップの目的をもう一回確認したり、スケジュールをこれからどういうふうにするんだというのを話して、午前中のうちに第3段階、第4段階、計画書まで理解した形です。それなので、風船図は各グループに1個しかつくりません。私は自分が早く進めれないので、1個でもいいから事業が出たら、そこからはどういうふうにつなげていって、第3段階のような考え方を、そして計画書の格好をつくるかと。それができればいいなと思いましたので、幾つかつくって、組み合わせちゃんとした計画書をつくれればいいんですが、そこは余り気にしないで、とにかく1つの事業でもいいから、流れに沿ってやればいいな、というふうに分身に言い聞かせながらやったという感じで、2日目の午前中には終わりました。

実施要領をつくり終わったら、今度最後に2日間のまとめみたいなことでみんなに話し合ってもらったんですが、話し合ってもらったというのは、2日間の振り返りの中身は、まずできた実施要領を発表してもらいますよということ、それをきちっと整理してもらったということと、あとそこに至る間、どんなふう話し合いが進められたかという、途中経過のエピソードを紹介してもらうことにします、ということを行いました。

それから、この研修で考えさせられたこととか得たことは何かというあたりを、2日目の午前中でその話し合いをしてもらうところまでいきました。2日目の午後からは、私、六郷町とか雄和町しか知らないもので、秋田県の六郷町の活動や、雄和町の平尾鳥地区の構想書について紹介して、前に新潟の飯塚さんからもらった反省というか、アンケートの中身のところに「調査って何？」というのがありましたので、こういうのをしている、調査というのは大事ではないか、みたいな意見があったんですよ。それで「ああ、調査について触れればいいね」と思って、平尾鳥ではアンケート調査をしたのが2ページぐらいあったので、それを追加して話し合っていく中で、条件が出てきたりして、その条件をみんなで「本当にそうになっているんだろうか」というふうにして、「じゃあ、調べてみようか」ということで調査をやったんだよという話をして、調査というのは何でもかんでもやるのではなくて、必要に応じて実態を見るというの

で調査するんだよ、というあたりもつけ加えました。

それを2日目の午後の一発目にやって、その後報告会ということで、実施要領をまず発表してもらい、エピソードを発表してもらい、考えさせられたことを発表してもらって、発表会を1時間くらいで終わって、最後に2日間のまとめということで、念押しをしました。私も自分自身何を今までやったかと思ったので、何を言いたいのかというのをもう一回まとめということで、1枚スライドをつくって、それを皆さんにお伝えしました。

そして、地域づくり型、それをモデルのホームページも紹介して、これをもっとよく知りたい人はここにアクセスしてねと紹介して、大曲の写真で終わって。閉めは大曲の花火で終わりました。そういうふうな感じで、2日目、大体2時35分ごろ終わりました。ということで、まず時間的には思ったとおりの時間に、余り盛りだくさんではないんですけども、まずとりあえずいったということです。

私は、まず一番最初、2日間のスケジュールを伝えたり、半日ごとに、この後何をするんだよとか、ワークショップの見通しをイメージしてもらうことを心がけました。

それから、重要な部分とか説明に自信がないというのはいっぱいあったんですけど、テキストに書いてある言い回しを自分の言葉で考えようと思ったけれども、やっぱりこの言い回しがいいなと思ったものだから、これをそっくり何ページということで読みながら説明をしました。私は、結構テキストを使いました。その後に休憩をとりました。それは私の気分転換もありました。

ワークショップの目的を何回も繰り返して「これは何のためにやっているんだよ」ということで、それは念押し、しっこかったんですけど何回もやりました。

それから、一番最初、三角の図というか、ありますよね。あれも何回も「今これを行っているんだよ」とか、「ここを見ているんだよ」とか、それはしっこくやりましたね。

それと、グループにより進み方が非常に違うので、早目早目に説明した方がいいという鈴木さんのアドバイ스가あったので、なるべく心がけて終わる時間は守るようにしました。自分も終わりが長い講師は余り好きじゃないので、その点は守りました。

自分自身この研修とか、ワークショップの目的を自分なりに意識して、その都度話をしていたつもりです。

結果ですが、説明会のときに岩永先生から一応到達目標が6つあるということが示されていたので、一番最後にアンケートをとって、アンケートの項目は新潟の飯塚さんから送ってもらったのは、「研修でわかったこととわからないこと、疑問のことと、今後の活動に取り入れられる点」とかいうのがありましたが、私はそれに1つ加えて、ちょっと怖かったんですが、到達目標のところを丸してもらうようにしてみました。そうしたら、目標では、1番が5%というのが、実際は2.4%でした。2番が15%というのが15.7%、3番が30%というのが67.5%、4番が30%というのが10.8%、5番が0%、6が1人しかいません。ノーコメントもいました。

まず、1から3番までの人が、多ければいいかなと思って見たら、85.6%なので大方よかったかなと、自己満足の数字というところだったんです。

ふりかえりですが、全体の流れとか目的に沿った進め方として、中身は別として一応順調だったのかなと思われます。

ワークショップでのコメントを入れるタイミングとか、内容だとかが自分自身余り上手じゃなかったなという感じではあります。第2段階で、コメントすべきところを逃してしまって、結局実施要領の発表のときに「あのとき言えばよかった」みたいなコメントを言ってしまったので、参加者からのアンケートでは、「講師が批判的だった」というのも1枚ありました。だって障害者が減るとか、健康な人がふえるとかがあったんで、これは、「障害があっても楽しくということなのにな」と思いコメントに入ってしまった、きっとあれが批判的だと書いたんだなと思ったんですが、言わなくてもいいつもりだったんですが、やっぱりその方にとってはきついなと思ったのかもしれない。計画についても「これは行政的に実行できそうですか」とやさしく言ったつもりなのに、それは「できるか、できないだろう」と言ったような受けとめ方があって、自分自身の物の言い方というか、まだ初心者なのでうまくコメントできなくて、ついふだんも性格悪いのに、それが出たかなと思って、自分自身の性格というか、とにかく反省あるのみです。

さっき田中先生がおっしゃった、「なるべく細いところは言わないようにした」というのは、自分もそう心がけたんですが、今回しか言うときないと思うものだから、つい細いところが気になったりしたのがまずかったなと。心を大きく持って、目的を意識して、余り細かいことをいわなきゃよかったと思いました。

杉浦さんや、センターの方や皆さん来ていただいて、自分が今度ここで例や資料を出したらいいかとか、言ったらいいだろうとか悩んでいると「こうしたらいいんじゃないか」とかいろいろいっぱい言ってくれたんで、とても助かって安心して進めることができました。参加者のアンケートもいっぱい書いてくれた人もいて、私としては内容的にはすごい満足です。いっぱい書いてくれた人はうれしかったですね。「わかったこと」として、分析思考と統合思考の違いを書いてくれた人や、「統合思考の理解」として、ひとつの手段でそれを系統立てていったとか、「目的関連図の理解」のところでは、みんなでこういう目的で

やろうというイメージをもってそれを実現するために話し合うことの大事さとか、具体的にいろいろ考えていく重要性だとか、住民も一緒に入ってやっていくと満足度が高い仕事ができそうだとか、私の言いたかったこととかが書かれている人もいたので、よかったなと思いました。

「わからなかったこと」として、ワークショップの一番最初の「あるべき姿」を「具体的にあらわす」というのはイメージできなかつたみたいで、しょっぱなだったので、あとはなんとかいくのかもしれないねと。

「疑問に思ったこと」というところで、一つの話し合いを進めていくときに、何年もかかるということは、社会情勢が変わっていったらどうなるのかという疑問がありました。それに対して本当は何か言えればよかったのですが、終わってから書いてもらったので、私も「本当だなあ」とちらっと思ったりしたんです。

1つのテーマに絞らなくてもいいんじゃないかということも出ました。実は質問で「ほかのテーマでもいいですか」というのがあったんですよ。「いいよ」って言ったんです。だけれどもその言い方が悪かったんだか知らないけど、結局は車椅子の方にみんなまとまってしまったので「ああ意識させてしまったかな」と思いました。

本当に何がこれで変わるのか。受講者は実際の地域での現場に参加してないからイメージがないんで、本当にこれでいいものか、住民がそういう話し合いに来るものかどうか、本当にこれで効果があるのどうか、実際に効果があったのをもっと知りたいということでもあったかもしれません。

業務に取り入れられる点としては、この考え方そのものを、何とかして取り入れようと意識している人たちだったり、具体的な事業がいろいろ行政改革だったり、広報だったり、子育てのお母さんだったり、図書館のイベントだったり、意見設定の見直しだったり、業務の話し合いだったりというのが、具体的に事業を書きしてくれたところがあったんで、「あっ、これはイメージしてくれてたんだな」と思ったんですが、もっとこれがいっぱい出てくればいいなと思いました。

だから、思ったんですけど、自分たちについて、これは統合思考でいけるなどというのを書いてもらうとか、そういうのを、もし時間があれば演習でやれば、これを持ち帰って仕事で使えるかなと思うかなと思いましたが、それも時間がないのかなと思いました。

講師に対する意見として、話し合いが盛り上がっている時に、途中で講師が入れるコメントが邪魔された見たいと言うことがありました。コメントとか、みんなに聞いてもらいたいことを言うときのタイミングも、また難しいなと感じました。

いずれ皆さん自分の仕事を見直したり、それから、グループワークそのものを結構楽しんだ様子もありましたので、自分たちが参加して、自分たちが真剣に考えて、いろんな意見が出て、それがすごく楽しかったというのがよかったです。

こういうのは初めてだったので緊張したにもかかわらず、いろいろ助けていただいて何とか無事に終わったというところですよ。

岩永 では3回目でサブで入った渡辺さんから。

渡辺 気づいた点は皆さんと同じようなところも多数あるんですけども、考え方を重視するのか、それとも進め方というか、全体を通してやる方を重視するかについて、どちらがいいかは私にはまだ分かりません。岩永先生は考え方を最初にかなりしっかりおさえられますが、それを皆が同じようにできるかは分からない。今回、私が入ったときは全部やることを重視して、模範解答というか、でき上がったものを場所場所に入れていったんですよ。こういう方法は、いままで真似するだけになってしまうから、よくないんじゃないかと思っていたんですけど、見ていると、写していてもつじつまが合わなくなるということに気づいて、「それは何故だろう」と、戻っていつているグループがあったんですよ。また、見回っていて、どうコメントしたらいいかわからないことが多くて、詰まってしまって、結局は伝えられなくてそのまま放っておくことになったグループも、後になって、自分たちで、振り返っておかしかつた部分に気づいているところも見られました。こんな様子を見ていると、この考え方の本質や良さがに気付くところは人によって結構違って、講義で分かる人もいれば、グループワークの中で気付く人もいます。ただ、それだとかかなり余裕を持ってやらないと、気づいたりとか戻って返っていく時間がないんですよ。だから時間の限られたところだと、効率の良い方法も考えないといけないかとは思いました。

杉浦 まず、私がサブで入っての、自分のスタンスとして思っていたことは、考え方とか、ここでの目的というのを講師の方が説明されるので、私としてはなるべく充分に話し合ってもらおうということを頭に置いてたんですね。ちょっとおかしな話になってても、そのまま話し合ってもらっていると、いい状態というか、みんな納得していい方向に向かっているなということが結構あったので、今ではそんなに口を出さなくてもよかったのかなと思っています。

非常に素人的な感想、一番強く受けた感想なんですけど、こういう研修のサブというのを初めてさせてもらって、何が大切か、どういうことがこの研修で目的とされているのかというのはもちろん大切なんですけど、講師の方が何を伝えたいかということがはっきり出されていて、初めて研修生の人々が納得していくのかな。ただ教えるというのではなくて、伝えるというそのものを、例えば経験とか、そういうものが

あって初めて研修生が納得されるのかなというふうなことを感じました。

岩永 研修を担当されていた自治研修センターの鈴木さんと、現在研修の評価について研究している藤本さんから今聞いた感想を言ってもらって、目的・目標をもう一度確認して、その後細かい方法、技術、どういふふうに対応したらいいかと言うところも少し話したって行きたいと思います。

ただ、研修のスケジュールを前に言っておいたという話がでしたが、私はしなかったんです。というのは、これは単なる研修じゃない。ただ研修を受けにきて、先生が何かしてくれるのを待つと言う研修じゃない。自分たちで考え方を受けとめて、自分で考えていく練習なんだから、という考えをベースに置いているんで、「何時までによればいいんですか」という質問には、「それはあなたたちが決めること、あなたたちがいつやめるかの問題だ」というふうに戻し、「休むのも自分たちで取ってくれ、始まりも自分たちで適当に来てやってくれ」と言うんだけど、やっぱり集まったら、先生が「始め」というのを待っているという雰囲気は出てくるんで、そういうところが変わっていかないことには、幾ら分析思考、統合思考、主体性、自主性とか言ったって、自分のそういう体質が変わらないまま言ったって小手先になると思ってるから、その辺もどうしたらいいかということを進めていきたいと思えます。

最後までいくから、何時ごろどうしてという手順を持っていくというのを一つの目標とすると、もう一方の目標として考え方が変わらないとどうしようもないわけだから、できようができませんが考え方だということを両極端に持っていくと、手順と考え方の交わったところをどの辺に置くかということだと思わすね。それをどっちに重点を置くのか、真ん中に置くのか、どっちかにするかという話になってくるだろうと思わす。

鈴木さん、今みんなの話を聞いていて、感想なり、うそ言っていたとか……。

鈴木 今、岩永先生が最後におっしゃったヶ重要だと思うんですが、今回、2回目から8回目までは全部最後までいっていただいたんですが、その持っていく方が第2段階のところ、目的関連図、今までの自分のイメージは2枚書くもんだというイメージしかなかったんですが、1枚だけで計画書にもっていった方も3人いらっしゃいました。「ああ、そういうやり方もあるのかな」ということで、すごく感心した点はあったんです。

1枚書くか2枚書くかというのも、それぞれメリット、デメリットあると思うんで、あとは考え方を中心にして、岩永先生が1回目にやられたように模範解答例を示しながら「こういうふうに移しかえていけばなるんだよ」という説明だけに終わらせるのか、その辺が一番難しいところですね。

藤本 多分、私全体像は余りわかっていない中で聞いていると思うんですけど、ある何かを目指すのに、いろんな役割分担をされて、皆さんがいろんな場所で、対象が多分違うんですね。それに対して同じ目的に向かいながら、こういう緻密な会議のもとで準備がされて、また反省会を今日こうしているんだという、目的は明らかに共通認識のもとで話し合っておられるんだというのがよくわかりました。

私の研究は、そういうのがなされるべきだということを、保健所の研修、事業でも必要ですよというのを示せるようなものを今つくっているんですが、参加人数だとか実績ばかりを反省の表にまとめていたりして、1年の振り返りをやっているのに悩みを持っていて、もっと何が達成されたかというのを反省していけて、次につなげられるような評価ができたらいいなと思っていた悩みがあったんです。

今の中でも、人数とかそういうことはきっともう共通で、実績とかもわかっておられるんでしょけど、本当に話し合わなくてはいけないところが実践されている例を見せてもらったような気がして、研究の上意の段階の場面だなということを感じているところです。

あとは、幾つか私が仮説じゃないんですが、入れた項目での発言があったような気がして、ちょっとうれしかったんです。これは自分のことですが、ありがとうございます。

岩永 5分ほど休憩して、さっきの目的をもう一回確認をするというところからいきたいと思えます。

—— 休憩 ——

岩永 ちょっとさっき話したことでまず、目的・ねらいとして最後までいくということは最低条件にすることにしましょう。その際に作成する目的関連図の枚数ですが、最近では私もほとんどの研修では1枚にしています。ただ効果を考えたときに最初に1枚目をちょっとやってみる、すると必ずつまるんです。

風船図は、最近では私もほとんどの研修では1枚にしています。ただ、有効性を考えたときに、最初に温泉なら温泉でちょっとやってみて、と必ず詰まるんですよ。詰まった段階で「例えば、これって条件としてこういうことが考えられるでしょう」とこちから例示して、それで1枚目は理想の姿で「今度は自分たちが考えた中から選んでください」とやると、割とスムーズにいくんです。

最初取っかかったものは完成させない。以前は最初取っかかったものを途中までやって、説明して、それで新しいのもやって、そうする考え方や話の内容がそれでかなり変わるんです。それで「もう一回前のに戻って」と言っ、最初の練習でやったのも完成させて、2枚合わせて実施要綱にしていたけど、最近では、とりあえず一通り事業に結びつけるところを見せて、それはもう捨てて自分のを選ばせて、計画書にするときには、大体全体のグループが5つか6つぐらいのときには、その全体で計画書をつくるように事業を選んでもらって、7つか8つぐらいのときには、3つと4つとにわけて、それぞれで共通の事業を選

んでもらったりします。

それともう一つは、風船図の最後ごろになってくると、勘のいい人が必ずグループに1人か2人いるんで、「共通の事業がないと計画書にならないよ」というと、よそと相談してわざわざ同じ事業を幾つか入れたりしてもらって、これをもとに計画書にするというふうにもっていくという手もあるんですね。

少し感じたことですが、「隣のグループのものを見せて」というのは、鎌田さん言ったんだっけ、あれどうやった。

鎌田 教室が目一杯でしたから、模造紙を5グループずつに分けて、模造紙を回し阿mした。

岩永 歩かせるという手もあるんだけど、そうするとみんながばらばらになると余り意味がないんで、模造紙を回すと、そこでいろいろ話しながら、さっき言ったように花丸つけさせたりするといいいと思いますよ。

もし、人を回すときには一団で行ってくれて、何ならグループごとに手を握っていくぐらい一緒に行ってくださいって言います。そうするとグループ内で話師ながらまわる。。

それから、あるときグループをシャッフルしたら、最初嫌がられたんですよ。でも結果的にすごい広がった。同じグループでやっていると。固まってどうしようもなくなって、それで、グループをばらしたんですよ。最初嫌がったんです。自分のところから離れられない、せっかくここまでやったのって。でも、後すぐくスムーズにいったこともあったんですね。余り堅いグループが多いときには、そういうことも考えていいんじゃないかなという感じはしますけどね。

それから、車椅子をイメージにくいというのは確かにそうかもしれんけど、今ちょっと僕がメモしたのは、もしかしたら発想が出てこないことの言いわけをしているんじゃないか。「じゃあ、ほかになあに」って問返してみると、結局イメージの出ない人は出なかったりするかもしれない。ある町で、「商店街がどうなったらいい？ どんな商店街だったらいいか」という話し合いをしているんですよ。それは入りやすいけど、本来言ったら、本当のブレイクスルーの見直しでは、その町のそこに住んでいる人たちの暮らしがあって、その中で商店街がどういう役割をするか。その人たちのこんな暮らしを実現するためにいろんな条件がある中で、「あっ、ここのところは商店街ができるよね」って話し合っ、て、「だから商店街では」という、あれで言うと第1段階から第2段階、第3段階進んで、「だから商店街では」というのが出てくれば、もっとブレイクスルーする。先に商店街をどうするかと言うところから発するとなかなか思いがけない話が出てこない。では、商店街を背景にした人達の暮らしと云ったら出るかと言ったら、多分それほど出ない。要するに、自分自身がブレイクスルーしてないと出ないんですよ。どうもその理由づけに車椅子だから出ないと言っているようなところもないんじゃないかなという感じが、しないでもないような気がするような感じもちょっと受けたんです。

ただ、僕は「健康」のことを政策形成のなかの目的の具体性や仕組みづくりの例として話します。それぞれの地域や基本計画の中によく豊かさだとか、快適さだとか、生きがいだとか、安心だとか書いてあって、それは、ある意味では健康なんだけれども、「健やかさって何なのかって考えたときに、人の暮らしで考えなくちゃいけないんじゃないの」という問題提起なんですよ。その例として、健康を考えてみましょう。その例として、障害を持った人の健康って考えてみましょう。障害の程度っていろいろあるから、その例として「車椅子の人が」というストーリーなのに、こっちが「車椅子の人が」って、そのところで黒板に出してしまうもんだから、「えっ、車椅子をどうするか」ってことになってしまう。これはある村でやったときも、「うちの村は坂道が多いから車椅子なんて考えられない」って言うから、「そういう問題じゃないでしょう」ってことなんです。我々がそこを押さえておく必要があるだろうと思います。

この「統合思考による政策形成」ということの非常に大きい問題というのは、ただただ私たちは事業をどうするかとか、予算がついたからとか、その発想から「もっと人たちの暮らしを中心に考えなくちゃいけないんじゃないの」というところが大きいと思うんです。それを強調すべきなんじゃないかな思いました。

だから、思考枠組みが変化しないままに、やり方をやっていると、やり方はわかるんだけど、今回皆さんたちがついてきているからさっき飯塚さんが言ったような、「障害者が減るなんておかしい」という意見が、そういうのになれている人が見ているから言えるけれども、自分のところに戻ったら、やっぱりそういうのを目的に立ててしまったりするようなことが起こって、そうすると条件が全然広がらないから「何だ、ちっとも変わらないじゃないか」みたいなことになってくると思うんですね。

僕は前回は途中でかなり強い口調で言ったんですけど、「あんたたち本気で考えているかい？ 研修でこうやれって言われたから、このステップをたどっているだけではないか？ 本当にあなたの町の自分の周りのことだとか、こんな人がいるんだよなって、そういうところで本当にどういう政策を立てていったらいいんだろうかっていうことを、真剣に考えながらやっているかい」ということは、どこの研修でも大体途中でやらないと、だんだんふざけてきたり、やっているうちに「研修だから」みたいなようになってきたり、「先生どうするんですか」みたいな態度になってくる。

それと、さっき渡辺さんが言った、聞かれて何と答えようかって困ると。僕は大体そういうときに、「じゃ、あんたたちはどう思うの」というふうになるべく返すようにしています。それと「これでいいんで

しょうか」っていう聞き方はだめだというのも、かなり最初の方に言うんですね。自分たちが考えたこと二対して講師はどう思うかということにこっちが介入していると非常に受講者は気になってくるから。

さっき田中さんが言ったので僕もちょっと思ったのは、前は僕もすごく言っていたんですよ、一々。そうしたらあるとき、どっかの研修のときに、八千代市の佐藤チエさんに手伝ってもらったら、彼女がジイッと見ているから、僕も見ている何か言おうとしたら「言うな」と、「待って」って彼女が合図したの。それで結局何なのかと思ったら、自分たちの中で結構修正していくわけね。その間をどのくらい待てるか、それが今回は時間的な制約があるから。でも、そのことって非常に大事なことだと思います。

そうすると、あと最後も「ここまで持っていかなくちや」と思うとつい出るけど、「どうにかなるだろう」と思うと、「まあいか」とか、その辺でどこに重点を置くかということが大事なんだろうと思いました。

どうでしょう、最後までいくということをちゃんとした方がいい？

佐々 2回目のときは、先生と逆に本当に最後までいったんですね。鈴木さんからちょっと聞いていたのは、やっぱり自分たちのやったものがどうだったのか、ということを発表する場面が少しあると、「やって何だったんだろうか」という振り返りも、自分たちでできるのではないかということでした。そこで、少し発表も入れたり、最後までいくというというのは、私自身の説明もどこまでできているのかなという確かめもあったので、一応体験してみなくちゃわからないというところもあるけれども、やってみて、「ああ、やっぱりこういう考え方って、ここまでいきつくんだな」ということを体験的に学んでもらった方がいいのかなということもあって、私のグループのときも最後までいったら、「こういうことだったら、最初から教えてくれればよかったのに」っていわれて、「最初にも説明したよな」って思いました。

自分とサブの小野さんとも話したんだけど、そのところが、先生のスライドの中にもある「わかったつもり」というところを、もう一回使って説明すればよかったなとも思いました。つまり、聞いただけでわからなくて、実践してみて初めて「ああ、こういう考え方だ」とここまでいくんだ」ということを実感できるというのがあったので、今までの自治研修センターの研修のときも、そういうような意見があったから、「最後はこうなるよ」というふうに教えることも一つなんだろうと思うんですが、基本的には、自分でやってみたらいつの間にか計画書になっていたという、おもしろいメカニズムが働く手法なんだなということを経験的にわかる意味では、どんな形でも計画書まで、自分のものでやるか、あるいは何か与えられた教材の中で最後の段階までいくかはいろいろ方法はあると思うんですが、いった方が印象としても体験でき、理解できるかなと思っていました。

岩永 じゃ、一つの目標として、とにかく最終段階までいくというのを1つ入れる？

黒田 演習の最後の基本計画書の方の、基本的な考え方、目的を書きながら、グループで話し合ってきたことは何なのか、演習の一連のつながりがわかってくると思ったので、最後まで体験することが効果的かと思いました。

岩永 自分たちでやらせるということですね。

飯塚(俊)「条件をたくさん出すことが目的じゃないんだよ」というところを確認できるのも、結局実施要綱まで落とした段階になると、ここがこの部分にきて、ここがこの部分にくるから、たくさん出すことではなくて、関連を考えてどこを目指しているかということと、どの事業に結びつくかというところがわかるということでは、ある程度、実施要綱の形のプロセスまでは理解できた方がいいのかなと思います。って。

岩永 板倉町で、ファシリテーターの研修を2日間やったでしょう。あのときは自分たちでの計画書まではいかなかったよね。

飯塚(俊) いかなかったの、今度は住民と一緒に実施要綱までやっていったときに、「あっ、自分たちがやっていた作業というのはこれなんですね」というのがすごく落ちたんですよ、ファシリの方たちにも。

だから、やっぱりあそこの部分までいくと、苦しんだ分だけ喜びが大きいという感じがするのかなと思ったんですけどね。

岩永 ということで、計画書まで、とにかくいくということにしましょう。。

田中 ちょっと前置きをしたいのは、手法という言い方がよくないというか、ほかのプリシード・プロードとか、PCMとの比較で、今「手法」と言われているんだけど、手法というと技術のその部分だけに焦点が当たっちゃうから、そういう発想はやめた方がいいかなと思います、この間、ある事例の話聞いて、最近手法とらえられているなという感じがして、やっぱり考え方を学ぶというのがまず大事なと思うんです。

それは前提として置いて、ただし、今皆さんがおっしゃっていたように、最初から考え方が全部わかるわけじゃないんで、実際にやるのと考え方と行き来していくうちに充実していくというか、できてくるものがあって、理屈だけのものというのはいっぱいあると。

要するに、考え方だけというか、理念ばかり言っていて実践を全然教えない先生というのは、世の中に、いっぱいいるんで、それと同レベルになっちゃってはつまらないんで、バランスよく、手順だというふう

に理解されないように、ただども一通りやった上で、「考え方としてこうなんだ、それが大事なんだ」ということがわかってもらえるようにできたらいいと思います。

だから、一通りやることは大事だと思うんだけど、それが手順だけに終わらない考え方をどんどんと随時結びつけて、行ったり来り行ったり来りしていくのは大事なという気はするんです。実際に風船図を書いているときも、「最初に話をしたあの部分はこうですよ」とかやって、余裕があれば最後にもう一回大切なところをレクチャーし直すとか何かできたらいいなと思います。僕も今回それをねらったんですが。

岩永 私も、「手法という言葉を使わないようにした方がいい」と思います。私はむしろ「手順」だと思うんです。考え方があって、それをみんなで話し合っていくときに、手順としてこうやって話し合っていくと、みんなが何を考えているのかとか、そのために何しなくちゃいけないかが見えてくるという、その手順だと思う。

だから、これは単なる手順なんだから、背景には自分たちの実現したい地域の姿を描いて、そのための状況も考えていくという、そのプロセスがある。それはなぜかという、さっき言った、考え方が分析的じゃない思考のパターンがあるというつながりなんじゃないかな。

だから、そういうことをどこか話し合いをやっているときの前に張っておくといいかもしれない。考え方の枠組み、その話し合いの進め方、その手順として第1段階、第2段階、第3段階、第4段階とあるんだよ、みたいだね。

杉浦 この間、飯塚さんのときにも、飯塚さんは考え方が大切ですよと繰り返し繰り返しスライドでいうか、パワーポイントでなされていたんですね。本当しつこかったですね。

飯塚 (俊) これはどこかという話になると、やっぱりそうですね。

杉浦 常に目に入る位置に、考え方が自分がどこをやっているのか、どういう考え方に沿ってやっているのかというのがわかるように、張っておいたらどうですか。

岩永 今、パワーポイントなんかあるから、あれで、つくってやるといいですね。

今のでかなり私も目標が見えてきたな。そうすると、今回の研修の獲得目標というのが5つ挙がっているんです。それで、統合思考がなぜ必要かわかる。統合思考と分析思考との違いがわかる。統合思考を使うのはどのような場合かわかる。行政目的としてのしくみづくりということがわかる。5番目に統合思考による話し合いを体験する、と入れているんだけど、これについて、例えばその方法として、この進め方を一通り計画書なりつくっていくということできましようかね。そういうふうな目的と手段としてね。手段は、参加型目的描写法による計画書作成までを一通り進めると。

もう一つ気になったのが、さっき飯塚禮子さんの方で言った「事業を分けてみたらどうか」という話だったんだけど、私はもう少しこの人たちに、もっとふだんの考え方なんだよというところが強調されたらどうかと思ったんです。だって、住民にとってみれば、そういう話し合いって普通のことのはずでしょう。僕はいつも夫婦の話なんかで例を出すんだけど、ふだんの中でもそういう考え方をするんだよという。

それと、「事業を知らない」ってあったじゃないですか。福祉に関しての事業を知らないから出てこない。「でも本当は、こういうことを条件にするためには何をしたらいい？」とやると、それに適当に事業の名前をつけられただけのことですよ、現在ある中から拾ってこいじゃなくて。

杉浦 そのこのところが、ある程度行政の中で働いている方というのはわかって、そうやっているんじゃないかなって私は感じたんですね。

鎌田 既存の事業に落としてしまいやすいんですね。そこでかえって悩んでしまっているから、「そんなの要らないよ。新しい事業をつくったらいいんじゃないの。新しい名前をつけたらいいんじゃないの。あなたたちだからでき、考えられる事業があるんじゃないのかな」ということのために、こうやってみんなで話し合っているんでしょう、というふうに私は言いました。

岩永 そういうことが大事なんだ。

鎌田 ただ、もとの既存の知っているものすらもまだ少ないので、新たな事業と言われても、本当にこれが新たなのか古いのかもわからない段階の人たちだったのであれですけども、余りそんなものにこだわらなくてもいいんじゃないかなとは思いました。

あと、条件が余り出てこないで、下にくる事業も1個か2個くらいで終わってしまうグループも結構あったんですけども、やはりさっき田中さんがおっしゃったみたいに、余りたくさん数を求めるんだしたら、「その事業とのつながりで、ここの上もこの条件もきているのよね」という。ただ、足りないところにも第3段階で事業から目的の方にいくと、「あっ、自分たちは足りなかったんだ。こういう条件を出すべきだったのに出てないんだな」というのが、自然とわかっていっているような気がします。

岩永 それはよくあるよね。その段階まできて、初めて最初の段階の貧弱さに気づくというのね。

鎌田 完璧さを求めてもしょうがないから、第4段階までやって、そこに気づくのもひとつかなと思いますけど。

岩永 もう一つ、ここは行政から派遣されて研修と思っているから、そう考えるとつらいんだろうけど、「あなたが自分の家の周りでこういう話し合いがなされて、一住民として入ったときに考えてみたら」みたいなことを、もう少し言っているのかなと思う。

事業がいっぱい出てきて、すごい堅いのが出るじゃないですか。すぐ何とか講演会とか出て、それで私は「あなたこういう講演会に自分が住民だったとして、出たいと思う？」って尋ねたんです。役場から説明するとかね、そういうのがよく出てくるから、あなたが住民だったときに、役場からこういう説明会があるときに、ワクワクして出たいと思うか。

ちょっとしたそういう言葉を、「おれたちこういうことを言ったら」というのを集めてみるというのはどうでしょう。「自分で印象に残った私の言葉」っていうのか。「私が言った印象に残る言葉」とか。

ふと、そこで思いついて言うことがありますよね。「この段階で、こういうふうに、言ってみようか」という。みんなそれぞれうまくやっているから。

飯塚(俊) 講師が何を伝えられるかは、個人個人違うわけですね。その部分が研修生に一番納得させるところになるので、言葉を集めてそれを参考にすることはいいとは思いますが、それをすぐに使うことはできないと思います。

岩永 もちろん自分のストーリーが一番大事だろうと思うし、飯塚さんが自分の職場で研修をやるときに、「僕が行くまでに話しておいて」と行ったら飯塚さんが話していて、それを僕、外から聞いていたら、自分のストーリーをしゃべっている。「私は保健所でこういう仕事をしていて、こうだったけど、こういう考え方を知って」とか、そういう話をしてきた。

その対象的なのが、ある県のある町でやったときに、そこの保健婦さんが住民を相手に「今ヘルスプロモーションという考え方があって、それはWHOから何とかかんとか」とやり出して、みんな結構シラッとしていた。後がやっぱりうまくいかないですね。「ブレイクスルー思考というのがあって」とか、やり出すと、ただ私も他の人に話していて、面白い例だとか分かりやすい言い方だと思ったら自分の話に取り入れることは良くあるからそんなヒントになればと思います。黒田さん、真剣に考えているけど、何か。

黒田 講師が伝えたいことというのがそれぞれにあって、というところで、私は何をそこで重要としていたかなと振り返りをしてたんですけど。

たしかに計画書というもののまでいくぞというのをちらちらとしながら、しくみづくりと思いながらも、割とウエートをこっちに持っていったかなという反省もあるわけですよ。

岩永 どの辺にウエートを置いていたか。計画書づくりと、今しくみづくりと言われたけど、僕はやっぱり「あなたの発想が変わらないとだめだよ」というところで、とにかくいろんなところで自分たちで決めちゃえみたいなことに、かなり重点を置いていたところがあったんだけど、そういう言い方からすると、何かありませんか？

佐々 私、一つは何をやるにも目的があるんだなって。今やっていることと、最終的な目的はどこにどう結びつくかということが、「本当に自分に中でちゃんとわかって毎日の仕事をしていますか」という問いかけから、私はやることにしています。

本当はそうしたいんだと思っているけども、どうしてできないのかなと思っている人は、こうやるとできるかもしれないというところも一つあるし、あともう一つは、参加型目的描写法という考え方だから、私は「参加」というところがキーワードだと思っているんですね。住民参加もさることながら、行政の中だと職員参加すらうまくいってない、保健婦が自分の事務事業を悩みながらやっているから、その中で、みんなで話し合うと苦しいときもあるけど、うまくできてみれば「ああ、みんなで同じ目的を共有できたんだな」とか、こういう話し合いを住民とできたらもっといいけど、職場の中でも些細なことでみんなで集まると、ということが自由にできるようなことが職場の中でできるといいとか、そういう可能性みたいなのを体験できるというというのは、私の中ではすごく大きい目標になっていて、それを体験するために、こういうやり方というか、そういうものも話し合っているというような感じに自分の中では置いているんで、何か話を伝えたいなと思っているところもあるんです。

田中 私が伝えたいのは、しくみづくりのところですね。ねらいとしてというか、一番目指したのは、みんなが自分たちで主体的につくっていけるという雰囲気をつくるために、そのためにも泳がせたというか、意見を言わずに黙ってみるといいうか、主体的にやるということねらいとして、伝えたいメッセージとしてはしくみづくりなんだよということと、あとは目的について小さな目的は大きな目的の手段になっているよということを、それが計画書づくりの、いろんなところにそれが関係してくるんで、意識したかな。

目的を階層的とは私は今までは言ってなかったんですけど、「小さな目的は大きな目的の手段になっているんだよ」という部分で、今回は階層性という言葉を使いましたが。

鎌田 行政の人たちですから、私は二通りの方法をうまく使い分けるべきだということを頭に入れています。例えば、そのままやったら、どうやって問題解決型でやった方がいいものも行政の政策の中にはあるんだけど、今まではそっちだけで評価して実績を残してって、何%改善したっていうやり方だけでした。そうではなくて、行政に生かしていく事業を新たに組むときには、住民の人たちと一緒に話

し合いをしたり、ほかの機関の人たちと話し合いをして、ひとつの暮らしやすさということをいつも頭の中に入れてながら、事業を組み立てていくんだということも、これからはひとつの対策だけで解決できないものが多いから、これが必要なんだよということも、こういう考え方で話し合って事業を組んでいくことというのは、意識して頭のところに残しておいて、必要なときにはそれを生かすということ。片方だけでもだめだし、両方必要だけれども、これからにとってはきょうやっている研修と考え方というのは、絶対不可欠なんじゃないんだろうかというところを、バランスよくわかってもらうことを意識的に言いましたね。

そうでないと、片方が否定されて、片方だけがいいと思われるのも何かアンバランスですし、そうじゃなくて、物事を進めていくにはこういう方法もあるけど、こちらの方法ということもすごく大事なんじゃないかというのを気づいてもらえればいいかなと思いました。

田中 そういう意味では、今回は時間がなかったからできなかったんですけど、佐々さんと一緒にやったときは、PCMの手法をやってみせたんですよ。それと対比で、地域づくり型のでちょっとやってみせて、「こんなふうになるんだよ」という感じでやったときもありました。

鎌田 先生のテキストにもスライドにもあったので、そこは十分に時間をかけて話をした。

飯塚(俊) 私は物事の考え方、発想を、今までと違うやり方をすることによって広がりを持ったり、違う効果もあるというところを言いたかったんです。でも私が振り返ってみると、みなさんは行政の仕事というのが、本当に住民とか地域のことを考えて仕事をしているのかというところを、一番強調していたんじゃないかなと思います。

本当の住民参加とかパートナーシップというのはどういうことなのかということと、それから、みんなで話し合って共有していくことによって、どのような効果が生まれたのかとか、生まれるのかということも理解してもらいたいと思って、実際にやった事例から住民の主体的な活動にもつながるし、行政の中でも職種間の連携だとか、お互いの仕事が見えてきたり等につながってきたということも、少し強調したかなと思うんです。

飯塚(禮) 「行政の仕事は何のために」というあたりを時間をかけました。そして、それにくっつけて目的があって、その手段としてのいろいろなものがあるということも強調している。

行政、例えば福島県の総合発展計画の目的があって、そのほかに建設関係だとかいろんなものがあるから、とにかくそういう感じのもまた風船して、こういうのを見たら、「これは噴火型というのを選んだな」というのがわかるというような感じになっていくんですけども。

岩永 今、講師をした人たちから、自分はこういうのを伝えたかったということを一言ずつ言ってもらったんですが、渡辺さんと杉浦さん、今のを聞いていて「こういうことをもっと伝えるべきと感じた」とか、そういうのはないですか。

渡辺 やはりなぜこの考え方をするのかということが伝えるのが難しいと思います。ただ、最初の講義のところまで全て伝えられなくても、グループワークを通して、受講者自身の気づきに助けられることもあって、最終的には伝えることができるのだと思いました。岩永 それはこっちが伝えようと思っていること、という意味ですか。

渡辺 そうですね。人の話を聞いてなんとも思わなかった人も、話し合いの作業をやっているところで気付いたり、私の場合は初めてこの考え方を聞いたときは、先生の最初の話のところですごくいいなと思って……実は最後の3、4段階のやり方については最近までよく知らなかったんですよ。考え方の話を聞いて、何かに自分の生活に生かせる人もいるだろうけど、自分の仕事で計画書の作成が身近だったら、最後の計画書を書く段階に言ったところでいいなと思ってもらえるかもしれないと思います。

田中 なんでこの方法をやるかというのは、要するに今まで改修計画ばかりやっていた。そうじゃないんだよということを伝えれば。要するに、このテキストの中に全部含まれているんですが、凝縮されていると思うんですけど、最終的にはこればかりやっていたんだというふうには。

杉浦 内容としても充分だし、またこれに別の違う方面からの講師の方が入ってこられるようになってから、目的は同じとして、講師として参加された方は、また別の意味のメッセージを持ってこられるんだろうけども、いろいろあっていいと思うし、今まで聞いているもので充分だと思います。

岩永 今みんなの話を聞いて、ちょっとしたシェーマみたいなのが出てきたんだけど、立体的なくみづくりというのがここに出てくると思うんですよ。それをどう達成するかといったときに、参加的に目的を明確にしながら、主体性を持ってというのがあって、それで、そのさらに上なのか、全体を包括するような形で「住民の暮らしのために」というような構造。

何か仕組みが必要なんだけれども、その仕組みって何のためかというのと、一方に「健康な暮らし」というのがあって、例えば「寝たきりのまま生きる」、そのために仕組みがあって、そのために何をやるかという図の、「そのために」というところの各事業がというよりも、参加的に目的を明確にして、参加者が主体性を持ってというふうにすると、今皆さんが言われたのは全部入った形のシェーマができるような気がする。

田中 その「暮らしが」というのは、僕も大事だと思って後で言おうと思っていたんですけど、要する

にベクトルの縦と横と、この「暮らしが」って、実は蘇陽町で「暮らしがというのが入ったら」と言ったのは、これはすごい画期的なことだなと僕は前から思っているんですけど、それがアルフェクトにきれいにあらわせたんだけど、「暮らしとして」という視点が入ると、健康以外の分野でいく。例えば教育であっても、学力がいろんな段階の人がいるけど、その人がどういう生き方と、生き方としての教育のあり方とか、どういうふうになっていったらいいか。やっぱり暮らしとか生き方としての、っていうのを考えると、すごくいろんなことに整理がつかなくて、ほかの分野に応用ができるなっていうのはすごいと思いましたね。

結局「暮らし」なんだなっていうか、「生き方として」ということなんだなという感じがします。

岩永 多分そのことで、さっき飯塚俊子さんが言った「住民のことを本当に考えているか」という問いかけで、やはり一番大事なのは、「どうい暮らしを実現していくかなんだよな」みたいなところだし、主体性の場合に、参加の仕方が主体性だけじゃなくて……

今、蘇陽町で「暮らし」というのが入ったのは、「そよ風と暮らしと健康」をつくるときに、表題を住民に募集しようって言うていたんですよ。「何としようか」と。そうしたら、事務の担当の男性が彼が「こんなのどう」って持ってきたんです。それがこの「そよ風と暮らしと健康」だったんですよ。当時その課長で、今教育長をやっている人が言うていたのは、「ここに暮らしが入ったから、自分たちも入れた」と。もし、「そよ風と健康だったら、それほど一生懸命にならなかつたただろう」と言うていたのね。

今、田中さんが言うように、そこに「暮らし」って入ったというのは、ほかの課の人たちも結構関心を持っているわけじゃない。

それであと細かいテクニカルなところで何かないんですか。テクニカルに限らなくていいけど、もう少し「この辺どうしたらいいんだろう」といことは。

「コメントのタイミング」ってだれか言うてましたね。研修の「最初にコメントとするよ」と全体にいった？

飯塚（禮） やりません。

岩永 結構文句が出るんですよ。「あなたがとめたから話できなかった」と言うような。それも言いわけしていると僕は思うんだけど。

私は「コメントをするよ」というのをときどき言い忘れるんだけど、思い出したときは、初心者の水泳の練習と一緒になんで、変に泳いでいるときはコーチが「やめて」と言うて、「今、腕が曲がっていたよ」とかいろいろするでしょう。それと同じなんだから、とめるのは「申しわけない、ごめんなさい」と、最初ちょっと説明します。

だいたいどのグループもだいたい同じようなところでいき詰まるから、「申しわけないけど、全体に対して説明します」と言うことをまずこっちが言う。

飯塚（禮） 休憩をとると言うことですが、時間を決めないけれども、これは皆さんの考え方をもう少し勉強するような会なんだから、ある程度休憩の時間をとったけど、それをやったときに、自由にとった方が……本当に自分たちの考え方で進めていく主体的なものだから、という話を聞いたから、そうだとすれば、やっぱり研修生というのは研修なれしているんで、必ず指示が入ったところに順番に時間どおりにという頭にもう入っているんで、それにある程度合わせてしまうんですよ。

だけでも、そうじゃなくて「今回のこの研修は、こういうことで考え方の勉強になるんだよ」というあたりで、「そこら辺は自分たちで決めていくんだよ」ということなので、私は時間は取りませんよ」と最初にするれば、別に時間を決めなくてもよかったんだなと思いました。

そこら辺で、最初に「こういうスタンスでいくんだよ」というあたり、もっと言葉が足りない部分はあったのかなという気はしますね。

岩永 さっき聞いていて思ったのは、一時間ごとに休憩とったと言っていたでしょう。産能大の浅野さんという人は、「大体人は人の話を聞くのは1時間が限度ですから」と言うて、彼は大体1時間置きに休憩とるんですよ。

飯塚（禮） 私は、自分がいっぱいいっぱいになったから、という理由もあるんですけどね。

岩永 あと、確認しておきたいというのは何かないですか。

鎌田 先ほど先生が「時間を余り設定しない」ということを言うておりますが、私は1日半という時間の中で達成させるのは、実施要領で文章で書くところまでを、いかに15のグループに経験してもらうかなといったときには、みんなに「これからここまでは何時まで時間をとるから、少し話し合ってみて」というふうに時間設定をしたんですね。もちろん流れとか、遅さ早さも確認しましたがけれども、「あっ、このあたりまではできていな」と思ったら、次の段階に進むときには「みんな何時までだったらできる？」とか聞きながら、「じゃあ、10時何分までやってみようか」と、そういう感じでみんなの流れとかを見ながら、区切り区切りで時間を設定したんですね。

そこら辺はどうなのかなと思ったんですけど。

佐々 私黒田先生がつくったように、スケジュール表は一応つくったんですね。「このぐらいのときにこの辺をやるよ」と。ただ、必ずやり始めるときには「この作業は大体何時ごろを目安にやりましょ

う」ということは言ってたつもりなんですね。だけど、よく見ていると、進みぐあいが大分違ってくると、半分ぐらいできたら「次に進んでもいいかな」なんて私なんかすぐ揺らいでしまうので、そうすると「ちょっと早目ですけど」と言って始めたんですけど、それでよかった部分もあるし、逆に「もうちょっとちゃんとスケジュールを決めて」という意見も確かにあったし、あと、途中途中で何か言っていないと、いなくなっちゃうグループが実はあったんですよ。

それは何でいなくなったかという理由があって、行き詰まっていたグループなんですね。その行き詰まった理由もちょっとあるんですけど、あともう一つは、やっているうちに、書いていた条件が本当に現状と合っているのか確認したくなって電話をかけたに行ったり、そういうこともあったんです。

ですから、説明しようかなと思ったらいいグループがあるというのが1日目はありまして、それで、ほかのグループは「いないから何時からね」というのでまた退避になっちゃったりして、皆さんからもう少しちゃんとスケジュール管理を言ってもらえると、「休憩はこの辺かなというのを目安に動けるけどな」というような話で、パチパチやっていくのは私自身は余りよくないなと思っているし、あと、すぐぐ入れ込んでいるグループもあるんですよ。コメントしようにも近づけないみたい。そういうときにはとめてしまうとあれなので、大体少し聞いて、ちょっと違う話が出てきたなみたいところで、あとほかのグループをのぞいたりしている時期に、休みをとった方がいいのかなと思っただけですが、仕事について4年目ぐらいは何かあると楽というか気持ちの準備ができるし、成果品というのをすごく気にすると思うんです。グループごとに「ここまでできてOK」というのは、今までの教育がそうなんだと思うんですけど、ここまでできないと落ちこぼれたグループみたいなのがあって、目標に向かって邁進するグループもあるので、それはしょうがないかなとは思っています。ただ終わり方だけは余り変わらないようにして、おくられているグループに「やっつけてくださいね」というのも言おうかと思っただけですけど、次の日朝早くから来ているグループもあったんで、それはもうグループでやる気があってやるグループはどんどんやるしというので、一律に時間的なものも、目安は示してもその通りには、その場その場でいかないのかなと思っ

飯塚（禮） そういう話は、住民とやったときで、私たちのグループは、「そろそろ進んでいるけど、次どうしましょうか」なんて言いますよね。「もうちょっとする」とか言って、「もう少しやるべえ」と言われれば「やるべえ」とやったり、疲れて「帰る」と言えば「そうですね、やめましょう」ってやめるじゃないですか。そういうわけにはいかないんですよ。

岩永 僕は、今おっしゃったことを大切にしているつもりです。だから「ここは研修かもしれないけど、あなたたち自分の職場でやるときには、だれがもうやめようとか、次いくとかと決めるか」というと、やっぱり自分で決めなくちゃいかんわけでしょう。大事なことは、「このくらいになったら次にいったらいいのかということがわかることなんですよ」ということを説明して、「だから、この後の時間管理はあなたたちだよ。それで、それぞれのこぼこは出てくるよ」というふうにするつもりです。

ただ、「そろそろ第2段階ですよ」というのはどんなときかと言ったら、大体出たところに「じゃあ、どんなときに第2段階へいったらいいと思う？」っていうスタイルでやっているんですよ。もうこのくらいで大体出ないと思ったら「もう次だよ」と言って、「あと自分たちで決めてね」とやるんですよ。

時間が何時まででどうしなくちゃって、例えば1日しかないけど何かしなくちゃというときには、「本当は自分たちで決めるんだけど、そろそろ第2段階をやってみましょうか。でもこういう言い方というのは本当は僕もしたくないんだってということまで言うようにします。

飯塚（禮） すごく強調しなければいけないですね。

岩永 とにかく「あなたたちが職場や地域に戻ってやるときに、あなたたちが自分の職場でどうするって考えてくれ」と。そこのところはちょいちょい強調しているつもりです。

鎌田 初めてこの演習に取り組む人たちですから、これができたら次はどうなるんだろうっていう、期待と不安と未知の世界を頭の中に入りながら進んでいっているところが演習には多々あるんですよ。だから、ある程度の段階が頭に入っている人だと、「あっ、ここはこれくらいでいいんじゃない、そろそろ次に進もうか」というイメージが出ると思うんですけど、やっぱり研修生ですと、「これは次はスライドでは出ていたけど、どうするんだろう」とみたいなのがなきにしもあらずのような感触を私が得たものから、私自身の指導案が全くないままに、時間配分とかも大ざっぱに頭の中に描いた中で、テキストと先生のスライドを「このときはこのテキストのページを見比べよう」というのは描いていったけど、1日目に「何時何分に何をやらせて」というのは全く持っていなかったんです。

だから、皆さんの進捗状況に合わせて、次の段階に進むときには、でも、そろそろここはみんなもできてきているけど、確認をとりながら次に進んだ方がいいなと思って、少し時間配分を調整しながらやっただけですけどね。そうしないと、わからないんじゃないだろうか。

岩永 今、鎌田さんが言うような雰囲気が見えるときがあると思う。そのことと、もう一つ僕が何とかしたいと思っているのは、正解を求めようとする体質ね。「これでいいんでしょうか」と確認して、「いい」と言われたら安心して次に進む。その不安さが見えるときがある。だから、その2つは指摘しておくんです。「あなたたち正解求めてないか、これには正解はない。あなたたちが考えなくちゃいかん

だから、僕たちに聞かれたって、僕は福島のこと全然わからんから」っていうことと、もう一つ、今言った、先がどうなるか見えないと進めないというのは、逆に言ったら、行政でどっぷり浸かっている。

さっき渡辺さんが、考え方を聞いたところで「何かおもしろそうだ」と思ったという。「で、どうなるの」って、行政やっていると「だからどうなの」、さっきも出たけど、「効果は」「どっかやっただとこあるの」って、それを確かめてから自分はやるかどうかであって、自分が「なるほど、そう考えなくちゃいけないのか。じゃあ、どうしたらいいんだろう」って自分で考えるというところね。先どうなるかわからんけど、「さっきの話って何かストーリーがありそうだから、とりあえずやってみようか」みたいなところで、「とりあえずやらないかい」という、必要なのは未知の船出に小さな勇気、「ちょっとした決断と勇気なんだ」というのはよく言いますけどね。

「石橋をたたいてたたき割るようなことはしないで」とか、割ろうと思えばどんな石橋だって割れるんだから……。

飯塚（禮） あと気になるのは説明書。この計画書は説明書なんて要らない。

岩永 ちゃんとできたのを説明書に載せなくちゃみたいなの。

飯塚（禮） そうですね。

岩永 説明書の話は僕大体するんですけどね。

時間管理を自分にさせながら、いかにこっちがしたというふうに思わせないようにしていくかという、そういうテクニックがあったらいいんでしょうね。

田中 テクニックというか、自分の中では「大体こんなもんだな」と思っているわけですよ。だけど受講生には言わない。大体進んでいるのを見て、それと多少適当にずれても構わないから、5グループ見て、次のところにいけそうだなと思ったら、そこで次のところの説明をしていって、何となくやっとうちに、どうしてもどこか削らないと間に合わなくなったら、そこをうまく削るとか、「ここは、いいから」とか、ちょっと答えを言ってしまうたりとか、そういうふう工夫して……。

だから、余り「何時までにやりましょう」とは言わない方がいいような気がするんですけどね。自分たちで考える時間があつた方がいいと思うので、作業が目的になっちゃうから、自分の中では指導する方では思っているながら、でも相手に合わせて、どうしてもつじつまをあわせなければいけないところは、省略するべきところは省略してつじつまを合わせるというか、テクニックというほど大したものじゃないけど。

岩永 私も、かなりちょいちょい強調するのは、「考え方の練習なんだよ」って言う。「考え方がこうなってくると、計画書ができてくるということだから、その正解も自分たちで考えるんだ」みたいなことは強調すると思うんですけどね。

幾つかのパネルが必要ですね。「大切なのは手順じゃない、考え方なんだ」みたいな。

それと「最後までいったらわかるよ」というのを繰り返します。「今の段階じゃ、とにかくわからんかもしれんけど、トランプのゲームで初めて習うゲームを一応話を聞いてみて、とりあえず1回やってみよう。

だから、サブでついでくれた人が、「何か一言言って」って言ったら、「自分は最初全然わからなかった。それで何回かやってみるうちにだんだんわかってきた」と言ってくれたんです。そうすると何かその場がホッという声があちこちから聞こえるぐらい変わるので、じぶんも最初はよくわからずに、でも住民とやって、やっとなし「こんなものかな」とわかりかけたみたいなことで「それを私はあなた方に今から伝えるから、多分最初はわかりにくいかもしれんけど」とかね。ただ、そういうのを嫌う人もいますよね。「そんなわからんことを何でするんだ」みたいな。

それと、「今までそういう分析的な考え方で脳みそがきれいにおさまっているのを、今違う考え方をしようというわけだから、脳みそが少しぐしゃぐしゃとなるのは当たり前だよ」っていう話をして、「そこで抵抗するとどうしようもなくなるから、溶けるままにして身を任せると、そのうち今度は統合思考と分析思考とでまた構築されるから、しばらくは脳みそが溶けるからきついかもしれんけど」ってしょっちゅう言いますけどね。

鎌田 でも、先生がおっしゃると「そうかな」と思うけど、私たちが言っても「何言ってんだらう、この人は」って思われる。

飯塚（俊） 反対に、「この考え方というのは決して特殊な考え方じゃなくて、皆さんだっやってるんですよ」ということを私は強調しちゃうんですよ。「例えば皆さんだっやって職場の中でどうしたら楽しく仕事ができたらいいとか考えることあるでしょ」というふうなことをちょっと例に出したりとか、反対にしちゃうときもあるんですけど。

岩永 僕が例に出すときは、「今夜のおかずは何しようか」というときに、冷蔵庫を調べて現状を把握して、問題点を探してやらないしょう」という、「何となくきょうはこういうのを食べたいと思うじゃない。それなんだ」って言う。

飯塚（俊） それはいいですね。

岩永 だから、そういうときさっきの脳みその話をすると、ほとんどが分析思考で、このくらいふだん統合思考を使っている、それはどういうときかと言うと、きょう何食べたいかと考えるときとか、映画を

見に行くときだって分析的には見ないんだよね。「あっ、これ見てみようかな」とか思って行くのに。

どうなんですか、少しストーリーでできたのかな。きょう集まっていたいただいた意義はいかがなものでしょうか。僕はすごくあった。

飯塚（禮） 説明のときの構造を壊すというスライドがありますよね。これがすごく重要なスライドなんですね。今の話ってこれですよね。私、これを説明するのに難儀したんです。自分でこれがうまく伝わったかすごく不安で心配だったんです。今の話だったんですよね。

岩永 『構造壊し』という本があるんですよ。人は変化に敏感だと。変化に敏感というのは、人は「世の中変わっているんだよ、時代も変わっているんだよ、変わるのが大切だよ」とよく言うじゃないですか。でもそれは「自分に変化が及ばないとき」って、その本に書いてあるんですよ。自分が変化しなくちゃいけないとき、急に保守的になって何か言いわけするんですよね、自分が変わらないことの言いわけをする。

なぜそういうことを怖がるかというのがそこに書いてあるんだけど、それは組織活動なんかにしても、組織が変化するとき、自分が変化しなくちゃいかんかというときには、「変わらなくちゃ」と言いながらも、結局もとの殻にだんだん戻っていつてしまうような。

じゃあ、ちょっと参加した感想なり、きょうの感想なり何なりを一言ずつ言っていたいただいて終わらしましょう。

飯塚（俊） 参加して、またちょっと見えなかったところがはっきり見えてきたところもあるかなっていう気がしましたし、岩永先生以外の講師の方がどんなふうにされたのかというのを、もうちょっと見てみたいなのを感じました。

それから、私の中でまだ整理がついてないのが、田中先生が浄書を抜いて事業を出発とした目的関連図の方をA3版にしたと。私はそれ反対だったんですよね。浄書をA3版にして、そのときに目的関連図を整理しながら浄書をつくって、事業を出発とした目的関連図の方は、またもう一度模造紙に戻したというような格好をしたんですけども、実際にはそこら辺、どちらかを多分抜いたりというところがいいのかなと思ったんですけど、「ああ、そういうやり方もあるんだな」というのは、すごく参考になりました。一度やってみたいなと思います。

岩永 目的関連図があっても整理して書いていこうとすると、すごくめっちゃめちゃになって、すごく難しいですね。あれは浄書をする段階で結構いろんなことに気づいていくというのがあるんですね。

田中 それはあるんですね。

岩永 とくに下手なときはね。

それはまた今後の課題として……

渡辺 私は1回しか参加してなかったので、自分の回がどうだったのか自分なりに評価できたのが良かったです。あとは「何かいい感じだな」と思いつつ、それを人にうまく伝えられないことが多いんですけども、そのための材料をすこし集められたと思います。これからは訴えるための手順を充実させていけたらと思いました。

鎌田 福島約600人から700人くらいのステップ1を受けた人たちが、ステップ2の自治研に集まったときに、どれくらい今年の研修の考え方というものを、実践しないまでも頭の中に残してくれているかなという長期的なものは、私が1年間いろいろな先生方を投入して実践した結果になるのかなと思うので、そのあたりはいかがなものかと、期待したいと思います。

鈴木 いろんな貴重な意見を聞かしていただきまして、ありがとうございました。当初の話では、後半部分はセンター職員が仕切ってほしいというような話もあったわけなんですけども、私もずっと入ってて思ったのは、先ほどの話にもあったんですが、やはりこういう考え方を実践したという思いを伝えてあげないと、本当に演習をやった手順というか、その方法だけの話になってしまうことが一番怖いという感じを受けているんですよ。

ですから、その辺の講師の方の本当の思い、今回入っていたいただいて、その辺すごく感謝しているんですけども、皆さんそれぞれの思いを伝えていただけたので、ふくしま自治研修センターとしては、本当に感謝しております。引き続き来年度もお願いできればと思いますので、ひとつよろしくお祈りします。

田中 今の話でちょっと思ったことは、「フィッシュボーン」ってこれの反対みたいな、原因をたどっていくという魚の骨みたいなので、どの行政でも研修ではあるけど、ついでに使われた例を見たことがないという感じがあって、そうならないようにしなきゃいけないなと。

だから、手順から見ちゃうとそうなるちゃうんで、本当に活動として何が大事かというのを伝えることは大切だなと。

今の鈴木さんのお話を聞いて、ふっとフィッシュボーンを思い出して、やっぱりこれ実践の活動につながるようなメッセージを出さなきゃだめだなと。ただの手法と言ってしまったらだれも使わないかもしれないなという気がします。

佐々 いろいろ聞いていて、テキストには「こういうことをねらおう」って書いてあるんですけど、それを自分なりにどうしようかっていうのをもち、パワーポイントもあって、少し先生の構成等は話しやすいように変えてしまったところもあったりして、それで抜いたところがもう一回どこか説明の仕方を

変えてやればよかったなって思う反省とかもいろいろあるんですけど、その辺をテキストとは別に講師のねらいみたいなものをきちっとしておかなくちゃいけないなということと、さっき話はしなかったんですけど、やっぱり4年目だということがすごく重要だなんていうのが、研修の当初やる前にすごく思っていたんですね。

というのは、「自分も4年目のときどうだったのかな」というのがあって、結構意気込みと現状でちょっとギャップでどうしようかと思うような時期だったなというところを、ちょっと講義の最初に思い出して入れたんです。その辺も、受講生のモチベーションというか、研修に臨む姿勢というあたりで、講師も息が切れてたりした人はちょっとここに戻って、同じような気持ちで研修がスタートできると構えができるというのもあるかなと思って、その辺は講師の考え方にもよるかなと思いました。

杉浦 きょうの報告会で細かいことなんですが、「あっ、こういうときにはこう言えばよかったのか」とか、そういうふうな学びがあったことが大きかったんです。

黒田 それね、私も一番の悩みだったんです。主目的をどこに置きながら演習を続けていくかということにつながりが見えてきて、本当によかったなと。ありがとうございました。

飯塚（禮） 私は行政職員だということをちょっと意識し過ぎたと思うんです。自分が職場で仕事をするときに、行政職の人たち、そういうのを意識し過ぎて……基本は、やっぱり住民の人たちと話していたところがベースだったんだと自分で言いながら、自分で気がついて、やっぱりだれが対象であろうと考え方を伝えるものは同じだったんだなというのを改めてきょう感じました。

藤本 興味があったのは、研修主管のところの人が、こういうふうなことをやってみたいという最初のあたりが何えたらなと思います。

岩永 今ちょっと僕聞いていて思ったんですけど、フォローアップとステップアップを考えないと。後につながっていかないだろうと思うんですね。だから、戻って何かやろうとした人たちに、どうフォローアップできるかということと、それを促すような、例えば1年後に何かのアンケート風にして、何か突っついてみるとか、「だれかと話したことがありますか」とか「話してみましたか」とか、そのアンケートの答えの中に「家族と」とか「近所の人と」とか「職場で」と入れておくと、「ああ、こういう人たちとも話せるんだ」というのが出てくるようなものをつくってみたり、というのもあると思うし、研修というのは結構予算が削られていく段階なので大変だと思いますけど、できればステップアップというか、何かちょっと次をやってみたい人みたいところで組めたらいいなと思いました。

それから、テキストを読んでこないだろうと最初から思っていたけど、やはり読んでこないとすれば、もう少し厚くして小さくして、ちょっと読めるようなふうに。

ただ、私も実際の場面ではこれを全然使かってないんです。「とに角、今は考えようよ」と。何か一生懸命メモをとる人がいるから、「とにかく書くなと、考えて」ということを強調して、いまからしゃべることはほとんど書いてあるから、後で確認に使ってくださいと言っているんですね。余り期待してないんですけど、読んでくれるだろうというのを。ただ、読む人は何人かはいるんですね。

田中 先生が今おっしゃっているように、復習用にすごい役立つと思うんですよ。だから、ある程度学んだ人がさらにフォローアップの研修があればいいけど、ない場合にはそのフォローアップの役割も果たすというか……。

岩永 それともう一つ思ったのは、さっき佐々さんがスライドを変えてみて、いろいろやってみたとおっしゃったんですけど、私も今、必ず研修の前はほとんどの場合、並べかえる。同じので多分使えなかったり、「これとこれ変えてみようか」と1枚変えるだけで感じが全然違っていたりするんで、やはり自分のストーリーに合わせて、もしあれだったらそれぞれがもっと工夫したスライドをつくっていただいて、それをまた集めてよりよいものができていくと思います。知恵を出し合わないで、なかなかうまくいかないんで。

どうもありがとうございました。ー了ー

厚生科学研究費補助金（社会保障国際協力研究事業）
分担研究報告書

日本におけるヘルスプロモーション展開方法とその発展途上国での適応に関する研究

－発展途上国における SOJO-Model 適応の可能性と課題－

分担研究者 岩永俊博（国立公衆衛生院公衆衛生行政学部長）

要約

昨年度までの研究によって、前提条件としての社会的背景や生活基盤の安定度、政治の民主化など違いがあるものの、ヘルスプロモーションの概念を基盤とした SOJO model を適応する基盤は途上国にすでに存在することが示唆された。

今回外国人研究者の協力を得て、SOJO-Model の発展途上国における適応の課題などについて検討した。国によって我が国に来た外国人研究者に対してモデルに関して説明して意見を交換したり、国際学会において考え方や進め方を発表し、それを基に意見を交換した。また、ブラジルなどいくつかの国では、実践活動も交えて適応の課題について意見を交換した。

その結果、社会的背景が異なるためさまざまな疑問や課題が出されたが、主に共通の課題としては、SOJO model とプライマリ・ヘルスケアとの関係、地域住民が主体になったワークショップによる計画作成の可能性、文化や教育状況の違う日本での活動を発展途上国に適応する可能性、非常に時間がかかるワークショップへの住民の関心の持続などが上げられた。これらに対しては、SOJO model 本質である、研修的側面、資源開発的側面なども含めて議論することで、理論的には納得が得られた。今後いかに実践に結びつくかが課題といえる。

さらに、すでに実践した国の報告では、それらの国でのこれまでの専門家教育や公衆衛生実践の歴史などを踏まえ、具体的な目的設定や参加的であることなど基本的な考え方を押さえておけば、それぞれの国での適応しやすさを工夫することの必要性も示唆された。

研究協力者

A. M. Mostafa Kamal

（国立公衆衛生院）

Paulo H. B. MACHADO

（Federal University of Parana）

SOJO Health Promotion Model: Activities and Appraisal in International Context.

Health Promotion (HPR) has achieved recognition as an important dimension of public policy to gain and sustain health since the early 1980s. Its (HPR) strategies have an impact on social, economic and environmental conditions that determine health. Because of effective and low cost health-enhancing strategies, it is in consensus that health promotion actions truly deserve to contribute establishing health in both developed and developing countries with equal potentiality. However, to maximize the outcomes from health promotion actions, a process model is highly recommended and demanded as well. In order to realize such demand, a health promotion process model, SOJO (System Oriented Joyful Operation) by name was developed by Dr. Iwanaga, a public health researcher of National Institute of Public Health, Saitama, Japan. The main focus of the present report is to discuss the activities of SOJO model and its appraisal in international communities. However, a brief discussion of concepts and procedures of SOJO model, and its application in Japan has also been brought in the report aiming to get a comprehensive understanding of the whole discussion. The total report has, therefore, been divided in the following ways:

1. Description of SOJO Model.
2. SOJO Model in international context.

Description of SOJO model:

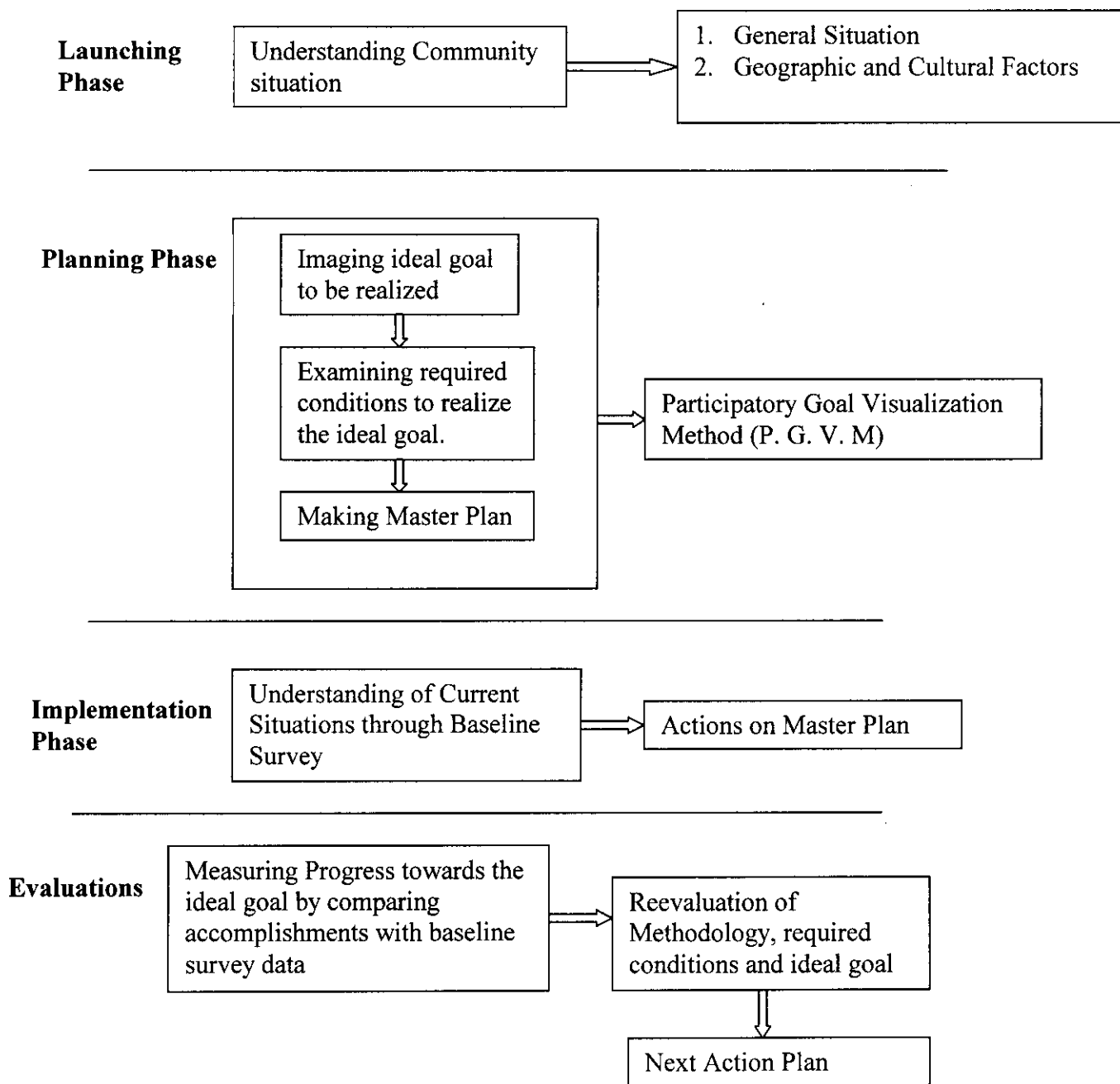
Concepts and procedures:

SOJO model is a community initiated community based participatory approach which aims to promote health through developing empowerment and participation at personal and community level. The model is in fact a process or systematic approach used to set an ideal goal and subsequently reach a concrete action plan to a public health issue. The users of the model eventually become capable to cope with their health problems through the activities of realizing the set goal directed by the process of the model.

The total process of SOJO model is composed of four phases: 1. Launching , 2. Planning, 3. Implementation and 4. Evaluation. At the beginning of the model, participants consisting of community members, administrative personnel and professionals of the locality have a joyful workshop where they share views among themselves to establish a healthy community. During the work-shop, they set their ideal goal as an image of healthy life and make a master plan based on the required conditions and finally take their respective roles to fulfill the required conditions in order to realize the ideal goal.

In the course of implementation, based on the master plan, participants get together monthly to evaluate activities and make new action plan based on the evaluation report. The evaluation and action plan are continued until the goal of creating a healthy community is realized. A flow chart of SOJO model is given below to enhance the understanding of the model's procedures.

Flow Chart of SOJO-Model



Application:

SOJO model has been being implemented at various community settings in Japan with positive feedback for more than one decade aiming health promotion in the community. After implementation of SOJO model at different communities in Japan, developments such as participation, empowerment and personal skills among the participants have been documented. Working through SOJO model over time, the participants have been able to develop their power to conceive a goal and accomplish ideas collectively. Some of the outcomes reflecting their such developments were mobilizing community people to improve the quality of life and support networks for elderly people, invitation from

other communities to share and extend activities, getting proposal to accept fund from the administration to build a community center for promoting activities etc. People working through SOJO model, regardless of age, education and economic background, and with a nominal cooperation from the professional and administration, learned how to make a role in planning, decision making and implementation of their own issue, health for example. The model also motivated people to accept the truth that lack of ready-made resources shall not be the excuse to refrain from development and movement. Considering such impacts of the model, it was hypothesized that SOJO model might also be potential to work in international context even in different cultural and economical aspects. Assuming such an idea, various activities were executed with SOJO model in different ways among international participants which will be discussed here now.

SOJO Model in International Context:

Accomplishments:

Various activities on SOJO Model were accomplished in international context since 2000. Below is the table describing those activities:

| Name of the Country | Nature of Activities |
|-----------------------|---|
| Brazil | 1. Dr. Paulo H.B. Machada, a public Health Researcher from Federal University of Parana, Brazil was invited to our department to study SOJO model for one-week in January 2000. Dr. Paulo participated SOJO model training workshop and visited one of the communities where SOJO model is being implemented. |
| Nepal and Thailand | Two researchers, one Dr. A. B. Joshi from Tribhuban University, Nepal; and another Dr. D. Dusit from Chaig Mai University, Thailand joined our department in Sept., 2000 to study SOJO model. The delegates joined SOJO model training workshops and visited communities where the model is being implemented. |
| Bangladesh | <ol style="list-style-type: none"> 1. I (the author) and one of SOJO model research network's senior members Prof. Matsuda of Shizuoka University, Japan, visited Bangladesh with SOJO model mission. A total of three seminars were conducted on SOJO model at three different public health research institutes in Dhaka, Bangladesh during January, 2001. 2. Two researchers, one Dr. K. Talukder of Institute from Mother and Child Health, Dhaka; and another Dr. M. Islam from ICDDR, Dhaka; joined our department in January, 2002 to study SOJO model. The delegates participated SOJO model training workshops and visited communities where the model is being implemented. |
| USA, Canada and Korea | International research presentations were made on SOJO model at various public health conferences in USA, Canada and Korea during the period from April to July, 2001. |
| China, South Africa | Lecture-presentations were made on SOJO model among the delegates from China and South Africa who visited our institute for training on primary health care system sponsored by Japan International Cooperation Agency (JICA). |